岐阜経済大学論集 33 巻 3 号（1999 年）

日本人の「待ち心」今昔（2）

武井勇四郎

序
第一章 「垣間見」の日本的風土
一節 「垣間見」の日本的風土
二節 「ま」「待ち」「待つ間」
三節 「待針」――日本語の主客重合
四節 「垣間見」の懸想
五節 「待つ間」は未来の垣間見
……（以上前号）
第二章 日本人の「待ち心」の原風景
一節 「待つ恋」の和歌と妻問婚
二節 三年待って逢わぬは縁の切れ目
三節 多情の和泉式部と憂愁の日々の『蜻蛉日記』
四節 待ち通す一輪のしおらしい花――末摘花
五節 待つ「夕暮」と後朝の「有明の月」
……（以上本号）
第三章 『枕草子』の待つものの品々と斎藤徳元の『尤之双子』
一節 清少納言の待ち時間観
1） 「こころもとなきもの」の品々
2） ほととぎすの初音待ち
3） 除目待ち
4） 効験「待つ間」の情景
5） 雪山の賭事の結果待ち
二節 『尤之双子』の待つものの品々

第二章　日本人の「待ち心」の原風景

一節　「待つ恋」の和歌と妻問婚

小倉百人一首には「待つ」の文字の入った和歌は三首しかない。その内の一首が次の素性法師の「待つ恋」の詠歌である。

いま来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな

（古今 恋四 691　素性法師）

ところが，『万葉集』には，すでに取りあげたように七夕や相聞では「待つ恋」の詠歌が数々ある。

君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸の簾動かし秋の風吹く

（万葉 1606）

我が背子を今か今かと待ち居るに夜の更けぬれば嘆きつるかも

（万葉 2864）

こうした類の歌は枚挙にいとまない。ほとんど女が男を，妻が夫を待つ恋歌で，こうした歌を「待つ恋」の歌という。先の素性法師の詠歌のように作者男性が女の立場で詠ったのも多々あり，この点で詠者を作家と同一視せず，「叙情主体」とした方がよい。

次の詠歌のように，「待ち恋ひ」の語句を折り込んだ詠歌もある。

秋風の吹きにし日よりいつしかと我が待ち恋ひし君そ来ませる

（万葉 1523）

『万葉集』と『新古今和歌集』までの八代勅撰集，さらに竹取物語以降の平安朝の物語や日記を読み合わせると当時の妻問婚の社会風習が垣間見えて来る。

妻問婚の段取りを辿っておこう。

1）　まず男が女に垣間見の懸想をする。

2）　相手に恋文をだす。間使い（＝仲介者）に想いを伝えてもらう。よばい（＝求婚）する。

3）　相手の親に隠れて何度か忍び逢いする。

4）　娘が母親の許可を得て結婚し，祝い餅をたべ，三日三晩男が通って共寝する。生まれた子供は母親と住む。

5）　男が女の所に通う。女は家で男の来訪を待つ。

6）　暗い寝所で共寝する。

7）　男は朝帰る。後朝（きぬぎぬ）の別れ。「後朝」とは二人が別々に衣をまとうので「きぬぎぬ」という。

8）　後朝の文を女のもとに間使いに持たせ，次の来訪を女に知らせたりする。

9）　長いこと通い続ける。

10）　一緒に住む。これを「すみ」という。

11）　男が正妻以外の女を求めて人目を忍んであちこち歩く。これを「お忍び歩き」という。公表されていない妻を「隠り妻」という。

12）　男の通いが途絶えがちになることを「夜離（よか）れ」，「衣離（きぬか）れ」という。

この妻問婚風習は鎌倉時代初頭まで続く。鎌倉中期になる宗尊親王（1242–1275）の「文応三百首」（岩波新版『中世和歌集』鎌倉篇）の恋歌七十首中「待つ恋」の詠歌は四首（232–235）しかなく，それも『万葉集』や『古今和歌集』の本歌取りに終始している。また藤原定家の子為家（1198–1275）の「中院詠草」（同上）には「待つ恋」の詠歌はない。このことからしても「待つ恋」の詠歌は鎌倉中期に終焉を迎えている。鎌倉末期の兼好法師は『徒然草』で妻問を叙景しているが，それは実景描写のそれではなく虚構文である（小学館新版『徒然草』104段）。

『万葉集』では春夏秋冬の四季の部立はできたが，恋歌は恋の発展プロセスに応じた配列にはなっていない。『古今和歌集』で初めて恋歌は5段階（恋一，恋二，恋三，恋四，恋五）に段階づけられ，後の勅撰集はこれを踏襲する。四季の詠歌が自然の諸相やうつろいの絵巻物とすれば，恋歌の配列は初恋から失恋への「恋の絵巻物」に比定できよう。前者は屏風絵，襖絵，障壁画に描けるが，恋の諸相や心の機微は言葉でしか表現できない。

恋一，恋二には相手と逢わない慕う恋，ほのかに見ての恋，忍ぶ恋，片思い，つれない恋，逢うことを願う恋，

恋三，恋四には男女が契りを結んだ後の思い，ままならぬ逢えない恋，後朝の思い，噂がたつ中の想い，深く思う恋，ひたすらに慕う恋，

恋五には逢うことが間遠になった恋，夜離れの嘆きの恋，失恋。

「待つ恋」の恋歌は恋五にまとめて集歌されている（古今 恋五 770–780，新古今 恋三 1189–1206）。よって，「待つ恋」の詠歌は男女が契った後の詠歌とみなせる。しかし，『万葉集』ではそうした細部の恋のプロセスの配列はないが，「待つ恋」の詠歌は妻妾と契った後の恋歌とみて大過ない。

『万葉集』の「待つ恋」の数ある詠歌から四首を取りあげておこう。

ありつつも君をば待たむうちなびく我が黒髪に霜の置くまでに

（万葉 87）

行かぬ我を来むとか夜も門ささずあはれ我妹子待ちつつあるらむ

（万葉 2594）

今夜の有明の月夜ありつつも君をおきては待つ人もなし

（万葉 2671）

秋風は日に異に吹きぬ我妹子は何時とか我を斎ひ待つらむ

（万葉 3659）

この最後の歌意は，秋風は日増しに吹き強めている，我妹子（わぎもこ＝妻）は私の旅の帰りをいつの日かと斎（いわ）い待ちしているだろうか。叙情主体は夫。「斎ひ待ち」とは妻が無事息災を祈り自ら禁忌潔斎して夫の帰

りを待つこと。「斎ひ待ち」の詠歌も「待つ恋」の詠歌の範疇に入る。

夫が妻の家を訪れ共寝して朝方帰るという通い婚がこうした「待つ恋」の詠歌を芸術的に数々創作したわけで，しかも，こうした詠歌が，ほととぎすの初音待ちとか，花や月の出待ちとか，旅人の帰り待ちとかを合わせ加えた詠歌より圧倒的に多い。この点で『万葉集』は「待つ恋」の詠歌の宝庫である。

『万葉集』の編者たちの集歌の課題の一つは妻問婚の「待つ恋」の秀歌を撰歌することにあったといえる。一旦こうした詠歌が撰歌されると日本人の「待ち心」の伝統となり，後の詠歌（本歌取りの詠歌）や歌合や物語に引用され，流行となり，一世を風靡し，さらに時代を経て引用を重ねられ滔々と流れる伝統の底流となる。日本人の「待ち心」の源流が『万葉集』の「待つ恋」の詠歌に発していると言っても過言でない。

『万葉集』巻４の相聞の部立は大伴家持が自らの贈答歌（700–792）で編纂したもので，その内容を巻８と併せ辿ると当時の妻問婚の様子を垣間見ることができる。彼は沢山の女に恋歌を贈っているし，また，彼に恋歌を贈った女性は十数人――笠女郎，山口女王，中臣女郎，大神女郎，河内百枝娘子，巫部麻蘇娘子，粟田女娘子，大宅女，安都扉娘子，丹波大女娘子，日置長枝娘子，阿部女郎，紀女郎，大伴坂上大嬢ら――に及ぶ。正妻は大伴坂上大嬢である。これらの妻妾の詠歌が巻４と巻８に集歌されている。

家持と後に正妻となる坂上大嬢との唱和の歌の数は夥しい。

朝に日に見まく欲りするその玉をいかにせばかも手ゆ離れずあらむ

（万葉 403　家持）

ますらを（＝家持）もかく恋ひけるをたわやめ（＝大嬢）の恋ふる心にたぐひあらめやも　（万葉 582　大嬢）

しかし，こうした互いの愛の深さの表現の詠歌に挟んで家持は他の女の自分への贈歌をも撰歌する。次の歌は笠女郎（かさのいらつめ）の家持に宛てた贈歌二十四首のうちの一首。

白鳥の飛羽山松の待ちつつそ我が恋ひ渡るこの月ごろを

（万葉 588　笠女郎）

大伴家持に幾月も想いを寄せながらの彼の来訪を待ち続けている女の想い。「恋ひ渡る」は幾月か待ち続ける想いの長さと恋慕の強さを松を掛詞にして伝えていて巧緻。家持は編者としては覚めた歌心の持ち主であって愛人たちの優れた歌を集歌して自慢しているのである。

序で取りあげた，

夕闇は道たづたづし月待ちていませ我が背子その間にも見む

（万葉 709）

の詠歌は，大伴家持の数いる妻妾の一人，豊前国の娘子大宅女（おほやけめ）の家持への贈歌とされ，「未だ姓氏を審らかにせず」として名は伏せられているが，家持自身の代作とも見られなくもない。

家持は『万葉集』巻4や巻8で，正妻以外の愛人の贈歌を集歌しているいわれには，当時の一夫多妻の公認の風潮があろう。家持は妻妾の贈歌を集歌することに少しも悪びれず，それどころかむしろ愛人がこれほどの歌人であることを誇りにすら思っている。

『万葉集』巻4の大伴家持（716?–785）の時期はといえば，越中守に赴任する30歳頃までの青春期――後に説明する「お忍び歩き」の時期にあたる。『伊勢物語』の在原業平が色好みの歌人だとされるが，大伴家持はその前身である。『万葉集』には公にされない「隠り妻」を詠じた歌もかなりある。

秋萩の花野のすすき穂には出でず我が恋ひ渡る隠り妻はも

（万葉 2285）

そして，『万葉集』巻12に，人妻に恋する詠歌や，人目に立ち，人の噂の立つ恋の詠歌が数々ある背景には一夫多妻と多夫一妻の混交があろう。

篠の上に来居て鳴く鳥目を安み人妻故に我恋ひにけり　（万葉 3093）

人言を繁み言痛み我妹子に去にし月よりいまだ逢はぬかも

（万葉 2895）

うつせみの人目を繁み逢はずして年の経ぬれば生けりともなし

（万葉 3107）

一夫多妻なら男がいつ訪れるのか妻妾は当てにできない，男はどの女の所へ出かけるか分からないし，間使いが文を必ず届けるとも限らない。それでも女は待つ。

眠も寝ずに我が思ふ君はいづく辺に今夜誰とか待てど来まさぬ

（万葉 3277）

待つことは辛い。『万葉集』に「待たば苦しも」の結句の詠歌が数々あることはそうした事情を反映していよう。

ぬばたまのこの夜な明けそあからひく朝行く君を待たば苦しも

（万葉 2389）

夜が明けなければよいのに，朝方帰っていくあなたをまた待つのは辛いと詠う後朝の歌である。

天雲のたゆたひ易き心あらば我をな頼めそ待たば苦しも

（万葉 3031）

心変わりがあるなら，期待させるようなこと言わないで欲しいの，これ以上待てば気が変になるから。叙情主体は無論女である。

「待たば苦しも」の詠歌は一夫多妻がもたらす，待つ女の悲哀，悲痛の詠嘆である。

ところで，当時は一般に一夫多妻であるが，そうとも限らない。清少納言は『枕草子』で妻問の叙景を随所で綴っているが（小学館新版 34, 61, 70, 71段），女が幾人かの男と交際している様子も綴っている。宮廷内で男が立ち去った女のところに別の男が来てその女を冷やかす場面が叙景されている。清少納言のこの叙景は注目すべきで，以下はその要約である。

〈七月の大変暑い頃で，どこもかしこも開けたままの朝がたである。板敷きの間に畳一枚敷いてあって，几帳が奥に押しやられていてその役目をはたさず開け放しである。男はもう帰ってしまったのであろう。女は薄い紫

色の衣を頭からひっかぶって着て寝ているようだ。下には単衣を着て紅色の袴をつけているが，腰紐のとても長いのが着物の下からのぞいているのでまだ解けたままであるのだろう。そこにどこからか指貫に狩衣を着た寝乱れ鬢の男がやって来た。女の局の格子があがっているのを幸い，簾をちょっとあげて中を覗いた。この男は女のもとから男がもう去ったと察していた。女の枕もとには夏の扇と懐紙が細くたたんであった。人の気配がするのでかぶっている着物の中から女が見ると，男がほほえんで長押に寄りかかって座っていた。遠慮する相手ではないが寝姿を見られたと思った。男は「名残の御朝寝ですね」と言ってさらに簾の内に身半分を入れたので女はどきりとして身を引いた。男は「よそよそしくお思いですね」と言っている内に夜も明け白んで来た。男は別れて来た女に後朝の文を朝霧が晴れない内に書こうと思っていたのである。するとこの女の所へ後朝の手紙を届ける使いが来るが，その男がいるので差し出せないで困っている。男は自分が去った女の所もこんな風であろうかと自然想像した。〉（小学館新版『枕草子』34段）

こうした情景からすると女も別の男と共寝していたことになり，当時，厳格な一夫多妻ではなかった。女もおおらかに別の男と共寝した。清少納言が女性としてこうした場面を描きながら，少しも悪びれず，むしろおおらかに認めている気心すらある点で興味深い。一夫多妻に一妻多夫が入り込んでいるのである。

とすると奈良平安期の「待つ恋」の歌は特定の一人の男を詠っているとは限らないことになろう。そうだとしても恋には変わりはない。男女ともに多情なのである。ともあれ，妻問婚の制度が「待つ恋」の詠歌を大量生産したのである。

二節　三年待って逢わぬは縁の切れ目

これまで「待つ恋」の和歌を中心に「待ち心」の原風景を話題にしたが，今度は平安朝の物語を中心に，待つ長さの視点から妻問婚の風習をエッセイ風に取りあげよう。待つにしてもどれだけの期間待つかは，当人にとって大きな問題である。

『古事記』を始め，後の能「錦木」に至るまで妻問婚にまつわる面白い悲喜劇がある。

相手の言葉を信用して長い期間待つことは，相手への想いの強さの証しとされる。『古事記』に次の話しがあるが，罪な話しだ。

〈ある時，天皇が遊びに出かけて三輪川にお着きになったとき，河のほとりで衣服を洗っている，名は赤猪子（あかいこ）という美しい乙女がいた。天皇は一目惚れして「おまえは男に嫁がないでおれ。そのうち宮中に召そう」といってお帰りになった。その乙女は天皇のお召しのことばをお待ちしてとうとう八十年もの年月を過ごしてしまった。

赤猪子はしわくちゃ婆さんになってもうお嫁にいけなくなったが，これまで待ちつづけた心を天皇に打ち明けないことには気が済まず，数々の贈り物を持って参内したところ，天皇はすっかり忘れていて「おまえはどういうお婆さんか，なにしにきたか」とお尋ねになった。そこで老婆は「お言葉を信じて心待ちしていましたが八十年も過ぎ，もう老婆で致し方ないですが，操を守ったことだけ申し上げようと参内したのです」と申し上げた。天皇は「私の言葉を待って操を守り娘盛りが過ぎてしまったことは誠に不憫である」と内心では思ったが，天皇も年老いて契りを交わすことができないわが身を悲しんだ。

天皇は若いときに共寝しておけばよかったという無念な旨の歌をうたい，老婆は老婆で若い人は羨ましいという意味の返歌をした。

そして多くの品物を賜って帰しておやりになった。〉（小学館新版『古事記』pp.341）

ここには「待つ」の言葉が四回も使われ，待ち続けたことの意義が印象づけられている。この天皇とは，旅ごとに出会いの女に求婚している色好みの雄略天皇である。赤猪子はその一人である。この話しの内容だと赤猪子は九十四，五歳，天皇の享年も百二十四歳とされているから結構出来た話しだ。差詰め姫松が老松になるまで「待った」といった，妻問婚の一夫多妻がもたらす罪な話しである。

天皇の約束の言葉を操高く守りつづけたことの讃美なのか，それとも天皇が最後に誠意を示した美談なのかに戸惑うが，長く待つことにはそれなりの忍耐心と我慢強さが要求され，序で取りあげた稚児の不体裁とは違って，待つことの尊さや美徳という考えが古くからある例証の一話である。

「後朝の文を待つが来ずに尼になる」——

この話しは『大和物語』（103段）と『平中物語』（38段）と『今昔物語』（30巻－2）に異文同趣で収載されているが，『平中物語』に拠ろう。『大和物語』の方が待つ情景がよく出ているので一部原文を（『　』）で補っておこう。

〈平貞文（さだふん）は，市に出かけたところ，車の簾から美しい女を見たので，供人に声をかけさせた。受領の娘であった。まだ男を通わせていない后の宮の女房であった。市から帰って，男は女を探し当てて歌を贈った。

ももしきの袂の数は知らねどもわきて思ひの色ぞこひしき

（歌意——宮中に仕える女房は沢山いますが，私はとりわけ緋色の袂の方に心ひかれます）

歌をやりとりしたあげく男は女と契った。

ところが翌朝，後朝の文もよこさず，次の夜になっても当人は来訪しない。

（『その朝に文もおこせず。夜まで音もせず。心憂しと思ひあかして，ま

たの日待てど文もおこせず。その夜した待ち（＝こころ待ち）けれど』）（小学館新版『大和物語』103段）

そこで女の召使いなどはこの男が通い出したと聞いて，文もよこさなければ，本人も来るでなし，いいわけの使いさえよこさない，よりにもよってあんな男となどと噂した。女は悔しく惑乱して，四，五日経ってしまった。食事ものどを通らず，声をあげて泣くばかりだった。

（『その夜，もしやと，思ひて待てど，また来ず。またの日も文もおこせず。すべて音もせで五六日になりぬ』）（同上 103段）

そば使いたちは，「そうくよくよなさいますな。なきことにして，別のご縁をお考えなさいませ。これで終わるあなたではありません」と慰めるが，女はものも言わず引き籠もってしまい，長い黒髪をかき撫でていたかと思うと尼削ぎに切ってしまった。〉（小学館新版『平中物語』38段）

男が行けなかった事情はこうだ。翌朝，後朝の文使いを出そうとしたが，勤め先の長官に急用ができ，長官がその男をお供に連れだした。しかも，なかなか帰さずやっと帰る段になったら，今度は亭子院のお使いが来てそのまま参上すると，大堰の御幸にお供せよとのこと。それで大堰で二，三日すっかり酔っぱらって前後不覚，夜更けてから女のもとに行こうと思っていると，今度は御所の方角は方塞がりで，廷臣一同方違えをしなければならない羽目になった。

〈男は女がどう心配しているだろうと，夜分手紙をやろうと，書いていると，誰かが門を叩く，誰だ，と聞くと，申し上げますというので，覗いてみれば，例の女の使いである。差し出した手紙を見ると，切り髪が包んである。

天の川空なるものと聞きしかどわが目のまへの涙なりけり

（歌意――天の川は空にあるものと聞いてはいますが，尼となった今，涙が川のごとく目の前に流れています）

さては，尼になったにちがいないと思うと，男はこれは大変と歌をすぐ

に返した。

世をわぶる涙ながれて早くとも天の川にはさやはなるべき

（歌意――世をはかなむ涙が天の川のようにはげしく流れても，そんなに早く尼になってもよいものですか）

その夜，早速女の所に行ってみると，本当にとんでもない姿になっていた。〉（同上 38 段）

当時は，結婚すれば祝い餅を食べ，男が三日三晩通い，後朝の文を毎朝送るのが風習となっている。

女は後朝の手紙が来ないので一夜で振られたと深刻に思い尼になる。とんだ結果を招くので読者は苦笑を禁じえないが，後朝の手紙を今か今か待つ新婚早々の妻の心境を思い測る必要があろう。後朝の手紙はそれほど愛の証しの重みを持っている。そうと分かれば平中の失敗譚としてはとても笑ってすまされない。新妻はどれほど後朝の文を待っていたか，その待つことで昂じた悲哀感が尼に姿を変えたのである。

清少納言も「胸つぶるるもの」の品々に，昨夜初めて通って来た男の後朝の文が遅いことを数え入れている（小学館新版『枕草子』144 段）。

ところで夫が旅に出て長いこと帰らなかったり，宮仕えに上京して三年以上も待っても消息がないと一般に諦めの心境になるのが普通だ。

当時の戸籍法（大宝律令の戸令）――「すでに成るとはいえども，その夫外蕃に没落して，子有りて五年，子無くして三年帰らざるとき，及び逃亡し，子有りて三年子無くして二年出でざる者は，並びに改嫁を許す」とある。三年間夜離（よか）れしていれば女は離縁して他の男との結婚が許される。つまり，三年待って逢わぬは縁の切れ目である。

『伊勢物語』の次の話しがそれだ。

〈昔，男が片田舎に住んでいた。男は宮仕えするとて女と別れを惜しんで出かけたまま三年帰ってこなかった。女は待ちわびて，強く言い寄ってきた人に，今夜逢いましょう，と結婚の約束を交わした。その時もとき，こ

の男が帰ってきた。男は，この戸をあけてくれとたたいたが，女はあけないで，歌を詠んで男に差し出した。

あらたまのとしの三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ

（歌意――三年間待ちくたびれたので，ちょうど今晩別の人と共寝をするのです）

と詠んで差し出したところ，

あづさ弓ま弓つき弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよ

（歌意――私があなたにしたようにその人に親しんで下さい）

と詠んで立ち去ろうとしたので，女は，

あづさ弓引けど引かねどむかしより心は君によりにしものを

と詠んだが，男は帰ってしまった。女はひどく悲しくなり，あとを追ったが，追いつかず，清水の湧き出るところに倒れてしまった。そこの岩に噛み切った指の血で，

あひ思はで離れぬる人をとどめかねわが身は今ぞ消えはてぬめる

と書いて，その場で死に果てた。〉（小学館新版『伊勢物語』24段）

待つことも三年が限度ということであるが，前夫への愛情を断ち切れない女の性に読者も感銘する仕組みの文の運びにしてある。

三千年待て――

中国には「白髪三千丈」のごときスケールの大きな話しが多い。大陸的風土によろう。三千年目に実を付けるという桃も中国の故事。また極楽浄土に咲くとされる優曇華（うどんげ）も三千年に一度咲き，この花が咲いたとき仏陀，転輪聖王，如来がこの世に出現するとされる。これにまつわる「優曇華の花待ち得たる心地」という表現が『源氏物語』に出て来る。

源氏十八歳の春，瘧病（わらわやみ＝マラリヤ風の病気）に罹って北山に加持祈禱を受けに行き，幼女（＝若紫）を見つけた頃，修験の僧都が光源氏を見てその美しさに打たれ，

優曇華の花待ち得たる心地して深山桜に目こそうつらね

（歌意――あなたは三千年に一度しか咲かない優曇華の花のようで，この世にあるとは思えない美麗な方です，今咲いている山桜なんかにはとても目移りなんかしません）

と詠じる。

源氏の美貌を三千年に一度しか咲かない花にたとえて絶賛したわけである。

『伊勢物語』に倣って書かれた『平中物語』の主人公平貞文は在原業平並の色好み。その32段に登場する女は一筋縄では落ちない女である。

その女はその桃の故事を引いて，三千年待てば実がなるという歌を貞文に贈る。

古りにける年の三年をあらためてわが世のことと三千年を待て

対して貞文はいくら待つにしろ命に限りがあるので三千年はとても待ち過ごせるものでないという泣き言の返歌をする。

心よりほかにいのちのあらざらば三千年をのみ待ちは過ぐさじ

すると女は秋まで待ちなさいと譲歩し，貞文に身を許した，とか（小学館新版『平中物語』32段）。

時代は下って鎌倉時代末期から室町初期にかけて能が演じられる。時はすでに妻問婚の風習から婿取婚に移行している時代であるが，謡曲「錦木」は平安時代の東北の求婚風習を主題にしている。

能「錦木」――

陸奥（東北）の狭布（きょう）の里にこんな求婚の習わしがあった。求愛の方法として好きな女の家の門に美しく彩色した木を立てる。これを錦木という。取ってくれれば願いがかない契りを結ぶことになるが，いやなら女は取らずにそのままにしておく。千本も三年間かかって立てれば本当のこころざしと見て必ず逢ったとされるが，父母がその男が気に食わず娘に錦木を取らさずにいると，男は三年間の心労でとうとう死んでしまう。それを聞いた娘

はさほど思ってくれたのかと自らも後を追う。これを見た両親は気の毒と思い朽ちた錦木の塚に二人を弔う。この塚を錦塚という。

錦木についての詠歌がいくつかある。

思ひかねけふたてそむる錦木の千束もまたであうよしもがな

（詞花 恋上 190）

立て初めてかへる心は錦木の千束まつべき心地こそせね

（「山家集」579　西行　岩波旧版）

この伝説や和歌を世阿弥が能に仕立てたのが謡曲「錦木」。能舞台はいわば，錦塚の上とみられるほど怨霊に包まれる夢幻の世界。男の三年間の恋の成就の執念が亡霊となる結構になっていて，中世の能に特有の世界が色濃く影を落としている。千本も錦木を立てて相手の返答を待ったが叶わなかったがために，その男の怨霊が錦塚から立ち昇る。

地謡「百夜も同じ丸寝せんと，詠みしだにあるものを，せめては，一年待つのみか，二年あまりありありて，はや陸奥の今日までも，年，紅の錦木は，千度になればいたづらに，われも，門辺に立ち居り，錦木とともに朽ちぬべき，袖の涙のたまさかにも，などや見見え給はぬぞ，さていつか三年は満ちぬ，あらつれなつれなや」（小学館新版　謡曲集2，「錦木」pp.193）

これは万葉人の「待たば苦しも」どころか，それを遥かに超え，三年間錦木を立て続けて返答を待つことは，中世の能ではその叶わぬ恋の怨念が死霊へと変わるのである。

三節　多情の和泉式部と憂愁の日々の『蜻蛉日記』

多情多感な式部と節操の高く嫉妬深い通綱の母――この平安朝初期の二人の女流作家は対照的な心性の持ち主である。いずれも妻問婚下の女の心情の諸相を自ら『和泉式部日記』と『蜻蛉日記』で鮮やかに描き出している。そればかりか両日記は妻問婚の風習を詳細にわたり描き出しているので，妻問

婚がいかなる結婚制度であるかがおよそ読みとれる。そして両者の心情吐露の諸相は現代の読者の共感をもそそるものである。片や男に出会えば掌中にせずにはおかない多情な浮気な和泉式部，片や夫の来訪をひたすら待ち，夜離れをかこち憂愁な日々を送る道綱の母。

両者の心情の対照的相違を両者の「待ち心」の様相に読みとることができる。和泉式部は『蜻蛉日記』の著者のように男の来訪をひたすら待ちわびる女とは思えない。

夫を幾人か替え，数々の和歌を詠じた多情多感な和泉式部の来歴は伝説に満ち素性のほどはよく分からないが，以下のことは分かっている。

和泉式部は970年代に生まれ，90年代に橘道貞と結婚して，小式部をもうけ，その後，冷泉天皇皇子為尊（ためたか）親王と親交するが，為尊二十六歳の病没後，その弟の敦道（あつみち）親王と恋仲となる。この敦道との十カ月間の想いを綴ったのが和泉式部日記である。しかし，敦道もはや二十七歳で死亡。中宮彰子に出仕し，1010年藤原保昌と再婚する。これが彼女の男性遍歴である。分かっているだけでも男を四人替えた。日記のわずかな事を材料にして，また式部が後世にどう評価されたかを頼りに，式部の心情と性格を推し量ってみよう。

次の式部の詠歌が小倉百人一首に撰首されている。

あらざらんこの世のほかの思ひ出でにいまひとたびの逢ふこともがな

（後拾遺 恋三 763）

恋三に集歌されているが，和泉式部集（『和泉式部集』岩波文庫 753）ではその前詞に「ここちあしきころ，人に」とあるから式部が病気のときに詠ったので逢いたい相手が恋人であるとは断定できまい。

『和泉式部歌集』（岩波文庫）には彼女の詠歌が二千首ほどあり，「待つ恋」の詠歌も少なくない。その一首——

よの中にくるしき事はこぬ人をさりともとのみ待つにぞありける

（岩波文庫 348）

『万葉集』の「待たば苦しも」の技巧的改作でとても名歌とは言えない。

ところで，『拾遺和歌集』，『後撰和歌集』，『千載和歌集』，『新古今和歌集』にも式部の詠歌が百五十首ほど撰歌されているのに，意外にも「待つ恋」の秀歌が撰歌されていない。

また，意外にも『和泉式部日記』には「待つ」の字句の入った恋歌は日記の最初の方にある次の一首を除いてない。

待たましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ今日の夕暮

（小学館新版 p.23）

『千載和歌集』のそれは異句であるが，叙情主体の情趣は同じである。

待つとてもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ秋の夕暮

（千載 恋四 844）

文字通り日記に「待つ恋」の詠歌が一首しかないことは，当時の妻問婚の制度からすれば女性としては特異なことである。これは何故なのか。この点は見逃せない。式部の色好みの心情が自ずと顕われ出てはいないか。

この日記に登場する相手は敦道親王で式部の三人目の男である。

この日記だけを読む限りでは式部はいじらしい純情な女なのか，多情な浮気の女なのか分かりにくい。しかし，敦道との歌のやりとりから垣間見えるものがある。その歌とは，彼とすでに契った関係にあるときのもの。

1） 待たましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ今日の夕暮

この歌を式部は敦道に文使いの童にもたせてやった。すると暗くなってから，敦道の返歌があった。それが以下の歌。

2） ひたぶるに待つとも言はばやすらはで行くべきものを君が家路に

ところで，この1)の式部の一首の歌意が情況の汲み取り方で注釈者によってまちまちである。そのくだくだしい違いのことはさて措いて，敦道の返歌の方から式部の詠歌を考える必要があろう。

2)の歌意――〈あなたがひたすらお待ちしていますとおっしゃるならば，ぐずぐずせずにあなたの家に出かけたのに〉 この敦道の詠歌の内容は明解

であって，別の解釈をうむ余地がない。

1)の詠歌の一本下線の「待たましも……あらましか」は仮定法である。つまり反現実の用法で，『千載和歌集』の詠歌も「待つとても……あらましか」で，同じ用法である。

〈もしあなたをお待ちして会ったなら今宵はこれほどまでにすばらしくなるのでしょうか，しかし，実際は……〉の意味にとれる。

それに童が手紙も託されずに訪れたことが問題である。二重下線の「思ひもかけぬ」を〈私に想いをかけない〉の意味と〈はからずも〉の意味の二重をとり，敦道の返歌の意味を汲み取れば，

〈もしあなたをお待ちしていればこれほどまで今日の夕暮は嬉しいのでしょうか，はからずも，あなたは私に想いをかけてくだされず，あなたでなくあなたのお使いが，それも来訪の手紙も携えず今日の夕暮に思いがけなくお出でとは〉

の意味にとりたい。

相手（敦道）の訪れないことへの揶揄混じりの歌ではないか。それに対して敦道が〈もしあなたをお待ちしますと〉いじらしい言葉の一言でもおっしゃってくれれば〈すぐにも飛んでいったのに〉とやり返した，とみたい。

男性優位の一夫多妻の観念からすれば，多情多感な女とされる式部は男から見れば厄介な扱いにくい女であった。敦道が通っているときにも別の男が通っている噂が絶えない。敦道は式部の所に他の男が通っているという噂に悩まされ式部への訪れを控えたりしている。

和泉式部はじっと相手の男の訪れを待つようないじらしい女ではなく，幾人もの男とおおらかに交渉している女流歌人。敦道の病没後，式部は今度は藤原保昌と一緒になっている。

当時の妻問婚を一夫多妻でもって割り切ることはできない。すでに述べたように『枕草子』の妻問叙景でも女はおおらかに幾人かの男と交渉を持っている。

鎌倉末期の『十訓抄』（1252年）『沙石集』（1279年）でも和泉式部が話題となる。彼女の許に男の訪れがなく淋しくなった頃，彼女は貴船神社に参詣し，目の前に蛍が飛ぶのを見て，

もの思へば沢のほたるもわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る

（後拾遺 1162）

と詠唱すると社殿の奥より，

奥山にたぎりておつる滝つ瀬のたまちるばかりものな思ひそ

（後拾遺 1163）

との神の示現があった，とか（小学館新版『十訓抄』10の13，岩波旧版『古今著聞集』174話）。

このことは『沙石集』によると和泉式部が最後の夫，保昌に愛想をつかされ貴船神社に出かけ，歳老いた巫女が鼓を打って前の裾をかき上げて三度ぐるりと回って（―エロチックな仕草―）「このようにしなさい」と参拝のやり方を教えるが，式部は顔を赤らめて返事もしない。巫女は「これほどの大事を思い立って来たのにどうしてできないのですか」と言う。夫の保昌はこっそり後から付けて来て，神社の木陰に隠れてこの顚末を見ている。ややあって，式部は，

ちはやふる神の見る目も恥づかしや身を思ふとて身をや捨つべき

と詠嘆する。保昌はこの様子を優しく覚えて「ここにいるよ」と言って連れて帰って，なお愛情浅からず連れ添った，とか（岩波旧版『抄石集』p.446）。

かくも強がりの和泉式部も容色の衰えた晩年（四，五十歳頃）は保昌にすがらざるをえなかったのである。

『十訓抄』のもう一つの逸話は式部の遊女ぶりを示している。式部が伏見稲荷に参詣に出かけたとき，時雨になったので稲刈りの童にあを（＝袷）を借りた。次の日，その童が式部に手紙を差し出すので見ると，

時雨する稲荷の山の紅葉ばはあを（＝袷，青）かりしより思ひそめき

とあったので，式部は気の毒に思って，奥においでと言って呼び込んだ，と

か（小学館新版『十訓抄』10の43，岩波旧版『古今著聞集』201）。

しかし，それより一世紀前の藤原清輔の『袋草紙』では「賤夫の歌」として，けしからぬ心を寄せたとしていて，和泉式部を遊女ぶりに仕立ててはいない（岩波新版『袋草紙』p.165）。

室町時代の『御伽草子集』の「和泉式部」では，式部は「やさしき遊女」とある。

和泉式部（十三歳）は橘保昌（＝先夫の橘道貞と後夫の藤原保昌の合成の名前，たちばなやすまさ十九歳）との間に男の子が出来，恥ずかしく思い五条の橋に守り刀を添えて捨て子にした。その子が後に高僧の道命阿闍梨になる。彼十八歳の時，内裏の法華八講を勤めた際に三十歳ばかりの女房（和泉式部）を垣間見て懸想する。彼は思いを遂げるため鉗子（こうじ）売りに変装して，和泉式部の下女に鉗子の数を数え歌で「五つとや，今や今やと待つほどに身をかげろうになすぞ悲しき，……十九とや，くるし夜ごとに待ちかねて袖いたづらに朽ちや果てまし」と詠い，女房に逢い引きを強く迫った。

天皇は鉗子売りの後をつけさせる。場所が分かったので女房（和泉式部）は小野小町のように四位の少将を悩ませるのも罪と思い，自ら下女と連れだって鉗子売りの宿を訪れる。そして鉗子売りの想いを遂げさせるために身を委す。後朝の別れの時，式部は法師の持つ守り刀から生みの子であることを知り，書写山に登り出家し性空上人に仕えた，とか。

これは小式部を男にとりなした母子相姦である。

この道命阿闍梨（＝藤原道綱の子）についての話しは同じ『御伽草子集』の「猿源氏草紙」にエピソードとして取りあげられる。それによればあらましこうだ。

〈和泉式部に，保晶という夫が通っていた，また道命法師という者も式部に通っていた。これを知った保晶，和泉式部に言う。

「私の言うように手紙を書きなさい」

「どんな文面をお書きするのですか」と式部がきくと，保晶は言う，

「最近，保晶は通って来ません。急いでお出で下さい。道命様。草々，和泉式部」とだ。和泉式部は顔を赤くして，

「これは思いがけないことをおっしゃいます」

しぶしぶその通りに式部は書く。しかし，隙を見て箸を五つに折って手紙に挟み込む。この手紙を読んだ道命は今すぐ来いと書いてあるが，五つに折った箸が入っているのは変だと思い，昔のある歌，

やるはしをまことばししてきばししてうたればししてくやみばしすな

（この歌に「はし」の文字が五つ折り込まれている。差し上げる手紙を本当のことと信じ込んで討たれて後悔しなさんな，という意味。）

を思い出し，保晶が待ち伏せしているに違いないと解読し，道命出かけず，危うく難を免れた，とか。〉（小学館旧版『御伽草子集』pp.225）

夫保晶が妻式部の多情ぶりに手を焼いているエピソードである。こうした後世の説話を読むと，女流歌人和泉式部は男の通いをしとやかに待つ女だったとは思えない。後世の人々はすでに『和泉式部日記』や歌集に彼女の多情な心情を読みとっていたとみられる。「待つ恋」の歌は，ひたすら夫を待つ女が芸術的に詠いあげる歌なのである。

なげきつつひとり寝る夜のあくるまはいかに久きものとかは知る

（拾遺 恋四 912）

この小倉百人一首に採られた詠歌には，『蜻蛉日記』の著者（＝道綱の母，以下彼女と表記）の，一夫多妻の妻問婚がよってもたらす悲哀，愁嘆がレンズの焦点のように収束されている。夫が通って来ない夜はすぐには明けてはくれない，それどころか夜明けまで寂しさを味わわされる。その寂寥感が独り寝する女を長い闇夜のように包む。彼女の夫兼家への想いが一途であるだけにその寂寥感は空漠たるものになる。名歌だ。

和泉式部にはこうした悲哀のこもった雅趣ある歌がない。

『蜻蛉日記』は兼家（二十六歳）の彼女（十九歳推定）への言い寄りから始ま

り，容色を失った三十九歳で終止符が打たれている。彼女の二十年間の憂愁の日々の綴りである。兼家は権大納言に栄進，子の道綱（十九歳）は右馬助に就いている。

『蜻蛉日記』には「待ち」を折り込んだ詠歌がいくつかある。その詠歌がどの時点で詠われているかを辿れば，彼女の悲哀，愁嘆の人生を垣間見ることができる。

日記は兼家の強引な求婚ぶりから始まる。兼家は彼女にいくつかの贈歌で求婚する。

人知れずいまやいまやと待つほどにかえりこぬこそわびしかりけれ

とか，

夕ぐれのながれくるまを待つほどに涙おほゐの川とこそなれ

（小学館新版『蜻蛉日記』pp.91）

と詠って彼女の返事を待ち焦がれている。しかし，彼女はすぐには返事を出さずにはぐらかし，返事を侍女に代筆させたりして兼家の強引な求婚にころ良い返歌をしない。

そうこうする内に彼女は彼と契りを結んでしまう。契ってしまうと今度は逆転して新婚早々から彼女は彼の来訪を待つ身になる。後朝の文は来るが通って来なくなり，通いの間引きが多くなる。

一年後の八月に彼女は道綱を出産する。彼女は契って一年目に町の小路の女宛の兼家のラブレターを発見する羽目になる。三晩も通って来ないので不審に思って人をつけさせると町の小路の女の所に出かけている。兼家のお忍び歩きの時分である。そのときの彼女の詠歌が先の有名な百人一首の名歌である。

結婚から二年目の三月桃の節句に桃の花を飾って兼家の来訪も待つが，翌日に来たので，

待つほどの昨日すぎにし花の枝は今日折ることぞかひなかりける

（同上 p.102）

と詠うが，兼家は町の小路の女に公然と通うので彼女に諦めの念が生まれる。

兼家には結婚する前から時姫という正妻がいた。よって彼女は側妻（そばめ）である。兼家の邸に出入りはできない。一度だけ兼家が大病のとき彼女が見舞ったことがある。時姫には子供（後の藤原道長ら）五人がいた。

彼女はたまに来る兼家に機嫌悪く辛く当たるようになる。近所の人も兼家がそそくさと帰っていく様子を見かけるようになった。訪れが途絶えがちなので，彼女は家の前を歩く人の足音で不眠症になる。結婚して二年半も経過した頃，町の小路が出産の気配なので，彼女はいっそ死のうかとも思う。兼家からは手紙だけが来て訪れはない。そんな気持ちの彼女に縫い物を依頼して来るので腹が立つ。町の小路の女に対する意地悪さと嫉妬心はその女が生んだ子の死によって解消する。兼家はお忍び歩きで兼忠の娘ともいきずりの情交がある。その娘を養女に迎える話しは日記の後半に出て来る。

結婚して十一，二年目，父は受領として地方廻りしたが，すでに数年前に他界し，姉も夫と任国へ出向き彼女の家は荒れ放題となり，兼家も途絶えがちで夫婦仲は破綻寸前，彼女の独り寝が続く。

夜のうちはまつにも露はかかりけり明くれば消ゆるものをこそ思へ

（同上 p.192）

夜の内に松には露が降りるが来訪を待つ間に夜が明けて消えるように，私の身もはかなく消えてしまうことを思ってほしい，と彼女は独詠する。

この彼女の独詠の時期は結婚して十六年目，彼女三十五歳頃。兼家は栄進して豪邸を造るが彼女は引き取ってもらえない。唯一の子供の道綱は十五歳に成長し，内裏の賭弓（のりゆみ）で優勝する。この独詠は，気分がすぐれない理由でもって兼家が一カ月以上通って来ない時分の歌。この詠歌にはは や人生の孤独な寂寥感と世の儚さがただよう。

来訪の夜，車の音がするので耳をそばだてるが夜が明けてしまう。いくら待っていても兼家は通って来ない。手紙さえ届かない。彼女は寂しい。

孤独だ。

その寂寥感と傷心を癒すために彼女は石山詣でをする。「石山寺縁起絵巻」にはかの有名な彼女の夢の場面がある。

結婚して十七年目，兼家が近江の女に三晩通い結婚した噂をきく。兼家は彼女の門前を素通りするばかりで寄らない。

彼女は山寺に籠もり精進して尼になろうとまで考える。とりわけ近江の女に対しては嫉妬心が強かった。後に近江の女の家が火事で二度ほど燃えたとき胸のすく思いをする。

さむしろのしたまつことも絶えぬればおかむかただになきぞ悲しき

（同上 p.226）

この詠歌は先の詠歌とおなじ年。兼家が彼女を訪れて，服用した薬を筵の下に彼が朝置き忘れたときの詠。

忘れた薬を狭い筵の下にどう始末してよいか分かりません，なにしろあなたをこころ待ちにする心も途絶えた今では自分の身の始末すらどうしてよいか分からない悲しさです。

この詠歌には怨恨，悲哀，憂愁を振り切った彼女の諦念すら読みとれる。

この直後，彼女が兼家の反対を押し切って鳴滝般若寺に籠もる。兼家は戻るべく説得して強引に迎えに来るが，その好意も束の間で，訪れが途絶えがちになる。再度長谷寺詣でに出かけ，これまでの自らの人生を通観して苦悩を乗り越える。

この四首の「待つ恋」の詠歌を見ても彼女の一生が憂愁の日々であり，段階を追ってその詠歌の内包する意味合いが変わっていく様子が読みとれる。はや「待つ恋」の詠歌はその内容を変え諦観の詠歌へと変わる。

『蜻蛉日記』――それは妻問婚がもたらす一夫多妻の女の悲哀の記録である。

たまにしか通って来ないことが日記に雨垂れのように綴られている。一見

すると「恨みつらみ」の綴りのように見えるがそうではない。和泉式部には，稲荷，貴船，書写の能の謡曲があるが，『蜻蛉日記』の作者は謡曲の主題にもなっていない。もし「多恨」なら，中世の謡曲の格好な材料になったはずである。謡曲の大半は怨霊，生き霊，死霊が主題である。能の舞台はいわば墓場の上である。次に述べる『源氏物語』にはいくつかの謡曲があるが，「末摘花」にはそれがない。

四節　待ち通す一輪のしおらしい花 ――末摘花

『源氏物語』は妻問婚最盛期の長編小説であり，光源氏の足取りをつぶさに辿れば妻問の風景が実写されていることが分かる。「源氏物語絵巻物」五十四帖が『源氏物語』のきらびやかな王朝の絵巻物とすれば，光源氏のお忍び歩きはさながら恋の絵巻物と言っても過言ではない。お忍び歩きで見つけた女に懸想したり，情交したり，通ったり，密通したり，正妻に迎えたり，はたまた新築した二条東院に引き取って庇護したり，源氏の最盛期に造営した豪華な六条院の四季の町にしかるべき女を迎えたりしている。お忍び歩きとは正妻のほかにあちこち歩いて側妻を求めることである。

源氏のお忍び歩きは，頭中将らとの雨夜の品定めの後の源氏十七歳から，葵の死後間もない二十五歳までが一番頻繁である（「帚木」から「花散里」まで）。お忍び歩きで見つけた女たちの幾人かは源氏の生涯を彩る意味で，彼女らの人物形象は見逃せない。このなかで空蟬と間違えた軒端荻，物の怪に憑かれて死ぬ夕顔，好色の老女の源典侍はいきずりの女で源氏の生涯に重きをなさないが，空蟬，藤壺，六条御息所，紫の上，末摘花，朧月夜，花散里，明石の君は，源氏の恋を彩る人物群である。

源氏の生涯は四期に分けられる。

1）「帚木」から「花散里」まで（源氏 17–25 歳），

2）「須磨」から「関屋」まで（26–30 歳），流謫の離京から帰京後。

3）「絵合」から「藤裏葉」まで（31–39歳），二条東院の新築，六条院四季の町の造営，源氏の最盛期――太政大臣，准太上天皇。

4）「若菜」から「幻」まで（40–52歳）の晩年。

その一期が源氏のお忍び歩きの時期にあたる。この時期に出会った女たちは空蟬，軒端荻，六条御息所，夕顔，桐壺帝の女御の藤壺，紫の上（葵の上の死後，正妻），末摘花，朧月夜，花散里の女性群。

二期の中心人物は明石の君，源氏の心を強く引き留め，源氏がよく通う。

三期は源氏の中年期，懸想した女は秋好中宮，朝顔，玉鬘。なかでも玉鬘には執着が深く，正妻紫の上を悩ますが，玉鬘が鬚黒と結婚して恋心も冷める。この時期に源氏が専ら通っているのは明石の君で，花散里（六条院東の町），空蟬（二条東院）は添え花的存在。醜女の末摘花（二条東院）は忘れられた存在。紫の上が正妻として六条院春の町に源氏と共住みしているが，源氏の側妻と懸想人に取り囲まれ一番悩まされる。源氏との間に実子がないことが宿運である。六条院の東の町に明石の姫君，夕霧，玉鬘を住まわせ，花散里をそれらの後見人にしていわば乳母的存在にとどめる。二条東院の空蟬は尼となり源氏の庇護を受けている。同じく末摘花もそうである。

四期は源氏晩年。朱雀院は出家のためその皇女三の宮を降嫁させて源氏に半ば押しつける。源氏四十歳，十四歳の幼な妻に困惑する。三の宮は柏木と密通し，罪悪感で前者は尼になり後者は悩乱して死ぬ。その密通で出来た子が薫。源氏は紫の上を出家させずその堅実さを賞揚し最期を看取る。

以上の女の人物群すべてをこれ以上細かくスケッチすまい。筆者の関心事は妻問婚下で源氏をどう待ち通したかの女性たちだ。とりわけ，末摘花と明石の君。この二人には女の「待ち心」が通底している。

末摘花――

この人物形象抜きで「待つ恋」の歌は語れない。紫式部は男を「待つ」ことの哀切さと「待つ」ことの美徳を「末摘花」と「蓬生」の二帖を費やして

女流作家ならではの見事な筆致で哀調を込めて描き出す。源氏のお忍び歩き頃の「末摘花」と流謫後の再会の「蓬生」との間には，「紅葉賀」「花宴」「葵」「賢木」「花散里」「須磨」「明石」「澪標」のかなりの年月が挟まっている。源氏十八歳から二十九歳までの十一年間（小学館旧版『源氏物語』(6) 鈴木日出男編 年立参照）。この長い期間源氏を待ち通す末摘花の心柄の意味を問わねばなるまい。

末摘花と契る前にすでに源氏は正妻葵の上のほかに，お忍び歩きの中で空蟬，軒端荻，六条御息所，夕顔，藤壺と情を交わしている。幼女若紫（後の紫の上）も引き取っている。

源氏は六条御息所によって呪い殺された夕顔のような，かよわい，いじらしい，つつましい女を求めてお忍び歩きする。故常陸宮邸に独り寂しく住んでいる娘の噂を耳にする。琴をよく弾く末摘花である。源氏は荒れ果てた邸で琴の音をこっそり聴いて気をそそられる。友達の頭中将と競い，ものにすべく何度か文を渡すが，ころ良い返事が得られない。命婦が相手は内気な性分で遠慮深い娘だからと言うものの，源氏はじれったく命婦に手引きをつよく求め，かなり待たされて父母の亡き寂しい邸で秋に契る。

そのときは暗闇のなかの夜這いで末摘花の容貌は分からずじまいである。しかし，感触がなんとなく悪い。源氏が宵雨を理由に通えない旨の後朝の歌を夕暮に届けさせる。それへの返歌，

晴れぬ夜の月まつ里をおもひやれおなじ心にながめせずとも

（小学館新版『源氏物語』「末摘花」p.287）

を侍従に手伝ってもらって返歌するが拙い。その後の源氏の通いも渋りがちになる。あの感触が近勝りなのか，近劣りなのか気になっていた源氏は，雪の降ったその年の冬の逢瀬で，その朝方，雪明かりで見れば背が曲がっていて，不格好なあきれるほど高く伸び，その先が少し垂れ赤く色づいている鼻，近見で劣る大変な醜女であった。源氏はしまったと思う。文才も拙い。身なりも荒れ果てた邸のように見劣りする。しかし，源氏はこれを不憫に思

い，また貧窮ぶりに同情して彼女の後見人になることを約束するほどの徳人ぶりを示す。源氏十八歳の男盛りのときである。

「末摘花」とは紅花の異名であるが，彼女の垂れ下がった赤い鼻がその名の由来で，その意味で末摘花は末摘「鼻」だ。源氏が関係した空蟬よりも醜女。末摘花は源氏に元旦の晴着を贈る愛情を示すが源氏の気に召さず，それに添えた歌も拙い。芸事の拙いことは当時の美人の観念から外れている。その上醜女とあっては。

源氏は末摘花に衣装を贈る愛情のほどを示すが，赤い鼻には興ざめで，幼女の若紫と鏡に映る鼻に紅など塗ってからかい興じている始末だ。

源氏明石の流謫中，双方ともに文通を交わしていない。その間，末摘花の邸宅は下人も次々に去り狐がすむほどに荒廃する住処となる。邸宅や家具を買い取ろうとする人の申し入れも断り，また宮家からあなどられていた伯母が仕返しに末摘花を娘の侍女にと思うがそれにも折り合わず，また伯母が夫の西国下向の折りに同行させようとするがそれにも応じない。さらに伯母が，仕えていた侍従すら連れ去ってしまう。それでも淋しい哀愁の深まる荒廃した邸をそのまま父母の遺風にしたがって墨守しようとする。同じようにひたすら源氏の約束の言葉をかたく信じて，父の残した古物を取り出して退屈しのぎをしながら源氏を待つ。

他方，源氏はといえば，流謫中，末摘花のことを寸毫も想い出していない。一方，外から末摘花に伝わって来る話しは帰京した源氏の権勢ばかりで，捨てられたのではないかと絶望の極みに陥る。それでも，源氏がいつか自分を想い出してくれるだろうという，淡い望みを繋ぐ。

当時，三年待って逢わぬは縁の切れ目で女は他の男と結婚してもよいとされていたことを考えれば，その期間はとうの昔に過ぎている。

京に戻った源氏はたまたま通りすがった折り，昔を想い出して荒れ果てた末摘花の住処に立ち寄る。それも事の序でにである。源氏中年にさしかかった二十九歳のときである。当時の松も小高く成長し長い年月が経っている。

「源氏物語絵巻」には供人の惟光（これみつ）を先導に源氏が生い茂る蓬の庭に入る名場面が描かれている。荒れ果てた庭と壊れかかった邸でもって末摘花の待ち通した寂しさまで映し出している絵師の筆使いに観者は哀感をそそられる。

惟光が荒廃した邸をまず内偵してから，源氏は待ち過ごしていた末摘花と几帳越しに対面し，〈長らく御無沙汰しても心は変わっていませんが，お便りも無いのが残念でして，もし今後自分が心変わりしたら約束事を破る罪を背負うことになります〉と詫び，源氏が，

藤波のうち過ぎがたく見えつるはまつこそ宿のしるしなりけれ

（小学館新版『源氏物語』「蓬生」p.351）

（藤波を素通りしようとしてもできないのは，藤が絡み付く松の木が私を待っているという宿のしるしだったからでしょう）

と詠うと，多年忍耐強く待ち通した末摘花は，

年をへてまつしるしなきわが宿を花のたよりにすぎぬばかりか

（同上）

（こんなに長い年月あなたをお待ちしていたかいもなく，この私の宿を藤の花を見る序でにお立ち寄りになられたというわけでしょうか）

と，皮肉っぽいが，さほどの恨みごとなく控えめに唱和する。

『源氏物語』の詠歌の中で「まつ」の字句の入った詠歌が数少ない中でこの双方の歌に「まつ」を織り込んだことはいわくいいがたく神妙である。女流作家紫式部が女の「待つ」ことの意味合いを深く知り尽くしていて，詠歌にその感慨を盛り込み，その心情を末摘花と分け合って詠じているかのようだ。女流作家ならではの，名歌とは言えないが女の「待ち心」の真情を汲み取った詠歌である。

「年をへてまつしるしなき」の末摘花の愁嘆はいかばかりのことか。それも二，三年のことではない。その三倍以上の長き年。源氏が幼女若紫を引き取って四年待って（正妻葵の上の死後），若紫十六歳の時に結婚して正妻にし

ている。末摘花が源氏と契った年齢をそれぐらいとしても，末摘花はや二十七歳を超えている。

なにしろ十一年の待つ歳月だ。しかし，歌には恨みっぽいところがない。

源氏はその後，その一途の心情にほだされて長い無沙汰を恥じ，彼女の庇護を誓う。後に二条東院に引き取るが，しかし，源氏はさほど熱心に通っていない。その後，「玉鬘」「行幸」に散見する末摘花はその古風な性格と文才の拙さのために源氏の悲しくも笑いものの対象になり下がり，源氏の中年以降では物語の舞台に姿を現わさない。紫の上，明石の君，花散里が源氏の栄華の六条院の四季の町に移るが，彼女はそのまま二条東院にとどまる。

作者紫式部の物語の構成の手腕も見逃せない。

意図的に末摘花を物語の舞台から遠ざけ読者の目に映らないようにして，いきなりうらぶれた「蓬生」の場面に再登場させ，彼女の，源氏によっても，また読者によっても忘れられた存在を印象づける。何年間であるかは作者は明かさないが，そこにいくつかの帖が挟まっていることによって長い期間であることが分かる仕組みにしている。その期間の長さが末摘花の邸の荒廃の描写で示される。その邸の荒廃に反して末摘花の待ち通す心柄はすこしも朽ち果てていない。その対比の叙景も見事である。邸をあばら屋にしてでも昔のまま保持しようとする頑なな心根と同じように，一途に源氏を待ち通す心柄には哀愁の恋を超え「待ち心」の美徳すら内から映現する。

「末摘花」の醜い末摘「鼻」は「蓬生」では源氏を一途に待つしおらしい花，待つ美徳の花に昇華される。待つ時の長さがそうさせる。この美に打たれて源氏は彼女への庇護を強く感じた。

一世紀後の鎌倉初頭の「千五百番歌合」に載る藤原俊成卿女の詠歌――，

ならひ来し誰が偽もまだ知らで待つとせし間の庭の蓬生

（146番　岩波旧版『歌合集』p.514）

評者はその歌の心を僧正遍昭の「わが宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせしまに」（古今 恋五 770）か，末摘花の「蓬生」の場面か，と

するが，いずれであるかは知りがたいとしている。

『無名草子』（鎌倉末期）を書いたとされるその俊成卿女は三,四人ほどの女房の対話形式で『源氏物語』の女性人物群の人柄を描きあげている。その中で源氏が訪れる「蓬生」を大変優艶だとし，末摘花を「待ち通した」女で，どの女性よりもめでたく，仏に生まれ変わるほどの宿運の人物と評価している。待ち通したことの美徳に関心のほどが示される筆致だ（小学館新版『無名草子』p.193）。このことに照らして先の詠歌は俊成卿女が「蓬生」を念頭に置いて詠じたとみたい。

『源氏物語』を取材した能には「野宮」「葵上」「夕顔」「半蔀（はじとみ）」「朝顔」「玉葛（＝玉鬘）」「浮舟」「源氏供養」等があるが，この「末摘花」の能はない。中世の能の大半は墓場の上が舞台で，なかでも「夕顔」は物の怪に憑かれた女の源氏への恋慕の霊，「野宮」は源氏の愛を失って伊勢に下った六条御息所の妄執の霊，「葵上」は六条御息所が源氏の北の方（葵の上）を呪い殺すすさまじい嫉妬の生き霊だ。

対して末摘花は十一年待たされてもそうした怨念を源氏に対して寸毫も抱いていない，しおらしい一輪の花なのである。そうしたしおらしさは醜女の美徳であって，墓場を舞台にした怨霊の能にはふさわしくない。末摘花は六条御息所と好対照の人物である。

詫びた茶室に飾られた一輪の花，――これが末摘花である。

明石の君には末摘花とは別の「待つ」ことの気心がある。それは「待つ」ことの謙譲の美徳とでもいえる。

源氏が流謫中，明石の君と契ったときが二十七歳。源氏が明石の君と別れて帰京のとき懐妊していて，形見として琴をあずけた。明石の君は姫君誕生後，源氏に手紙を出す。

ひとりしてなづるは袖のほどなきに覆ふばかりのかげをしぞまつ

（小学館新版「澪標」p.290）

私ひとりだけであなたの姫君を撫でるにしては袖は小さすぎます，覆うばかりのあなたの大きな庇護をお待ちします，という明石の君のつつましさは源氏の心に適う。

明石の入道は源氏の邸から遠く目立たぬ大堰川に邸を造り，明石の君を姫君共々移す。明石の君は三年後に源氏と大堰の邸で再会し，唱和する。

変らじと契りしこと（琴）をたのみにて松（待つ）のひびきに音をそえしかな

（同上「松風」p.414）

心変わりはしませんと約束されて下された琴を頼みに，松風にその音を響かせてあなたをお待ちしていました，という明石の君の心持ちが源氏の心の琴線に触れないはずはなく，源氏は明石の君に二条院に移ることを勧める，しかし，一歩も二歩もさがってつつましく断る。明石の君の奥ゆかしさは大堰川の邸で源氏の通いを待ち，再度の勧めも断り，明石の姫君の将来を考えて姫君だけを二条院に移すことをしぶしぶ承諾して，自らは大堰川の邸にとどまる。源氏は月二回ほど通い，明石の君はそれを待つ。

さらに三年後，造営した六条院の冬の町にやっと明石の君は迎えられるが，娘の明石の姫君は紫の上が住む春の町で育てられ，娘とは生き別れである。その悲しさもこらえる。明石の君は源氏にいつも一歩下がって従う女である。明石の姫君が入内して春宮と結ばれるときに初めて明石の君が後見役として八年ぶりに娘と共住みとなり，そのとき初めて明石の君は紫の上と対面する。明石の君は明石の入道が源氏に差し向けた田舎娘，それを自らわきまえていて，皆から一歩下がって「待つ」謙譲の美徳をひそかに示す女である。栄華の頂点にある源氏もそうした女を六条院の冬の町に迎えて庇護する。

以上，源氏を取りまく女たちの内，末摘花と明石の君の形象を大雑把にみても，当時の妻問婚の風習がさまざまな人物形象を生み出していることが分かる。女たちの「待ち」方に対する態度によって，その人物形象が造形される。紫式部はその「待つ」ことの色合いを同じ女として十分知り尽くして

いた。

五節　待つ「夕暮」と後朝の「有明の月」

清少納言は〈春はあけぼの，夏は夜，秋は夕暮，冬はつとめて〉として日本の四季の雅趣ある時間帯を謳い上げた。

奈良平安時代の妻問婚の風習は一日の中でも夕暮と朝方を情趣深い時間帯に染め上げた。

来めやとは思物からひぐらしのなくゆふぐれは立ち待たれつつ

（古今 恋五 772）

来ぬ人を松ゆふぐれの秋風はいかに吹けばかわびしかるらむ

（古今 恋五 777）

妻が夫を待っている秋の夕暮の哀愁深さが詠じられる。

「帚木」の「雨夜の女の品定め」で，頭中将が光源氏に見せて欲しいとした手紙には，「待ち顔ならむ夕暮などのこそ，見どころあらめ」とある（小学館新版『源氏物語』「帚木」p.55）。これは妻が夫を待つ夕暮の風情のことである。

月待つと人にはいひてながむればなぐさめ難き夕暮の空

（千載 恋四 873　刑部卿範兼）

あじきなくつらきあらしの声もうしなど夕暮に待ちならひけん

（新古今 恋三 1196　定家朝臣）

いま来んとたのめしことを忘れずはこの夕暮の月や待つらん

（新古今 恋三 1203　藤原秀能）

恨みわび待たじいまはの身なれども思ひなれにし夕暮の空

（新古今 恋四 1302　寂蓮法師）

同じ「待つ恋」の詠歌でも『新古今和歌集』では夕暮は物悲しいおぼつかない幽玄な気風が漂い，とりわけ，当てにならない人待ちにはこころもとな

い幽艶な哀切さが日暮とともに深まる気風が詠じられる。

当時は一日は夕方から始まる。夕暮は昼から夜へと変化が進むうつろいの時間帯で，灯火の少ない当時，月の出が待たれる。この時間帯に男は待つ女の所へ出かけ，女は門口を閉ざさず夫の来訪を待つ。夕暮はその点で特別の意味合いを帯びた時間帯となった。

他方また，共寝して帰る暁の頃も幽玄な妖艶な時間帯となった。

光源氏十七歳の時，方違えの夜，初めて正妻（＝葵の上）以外の女（＝空蟬）に源氏は好き心で言い寄り，いささか強引に契る。その明け方には有明の月がほのかに出ている。

「月は有明にて光をさまれるものから，かげさやかに見えて，なかなかをかしきあけぼのなり。何心なき空のけしきも，ただ見る人から，艶にもすごく見ゆるなりけり。人知れぬ御心には，いと胸いたく，言伝てやらんよすがだになきをと，かへりみがちに出でたまひぬ。」（小学館新版「帚木」p.104）とあり，源氏の心情の哀調と有明の月の叙景が融け合っている。

有明の月は十六日以降に出る月で，夜が明けても空に残る白い月。朝月とも言い，夕方に見える，七日頃に出る上弦の月の夕月と対照的な月である。秋に限られないが，秋のそれが一番風情があるとされ，男が女と共寝して帰るときに空にかかっている後朝（きぬぎぬ）の月が，有明の月である。その詠歌が多い。

九月の有明の月夜ありつつも君が来まさば我恋ひめやも

（万葉 2300）

今夜の有明の月夜ありつつも君をおきては待つ人もなし

（万葉 2671）

これらの詠歌は有明の月の出るまで男を待っている歌であるが，『古今和歌集』には後朝の「有明の月」の歌が多く詠じられる。それだけ，万葉人よりも有明の月のかかる時間帯が情趣あるものとなる。

有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし

（古今 恋三 625　壬生忠岑）

しのゝめのほがら〳〵と明けゆけばをのがきぬ〴〵なるぞ悲しき

（古今 恋三 637）

『千載和歌集』の後朝の詠歌――

帰りつる名残の空をながむればなぐさめがたき有明の月

（千載 恋三 838　摂政前右大臣）

のように「有明の月」の結句がある。

ところが『新古今和歌集』になると，「有明の月」の連体形止めの結句が二十首ほどある中で，後朝の叙情の詠歌が数々ある。

帰るさの物とや人のながむらん待つ夜ながらのありあけの月

（新古今 恋三 1206　定家朝臣）

いま来んと契しことは夢ながら見し夜ににたる有あけの月

（新古今 恋四 1276　右衛門督通具）

忘るなよいまは心のかはるとも馴れしその夜の有明の月

（新古今 恋四 1279　家隆朝臣）

これら『新古今和歌集』の詠歌に見られるように後朝の別れの「有明の月」は独特の哀愁の幽艶美を創り出した。かかる時間帯はもはや万葉時代のそれと大きく違う彩りを持つ。

清少納言は『落窪物語』の少将が結婚して落窪の姫に雨の日に三晩通って愛情を示すのは分かるが，ときたまにしか通わない女の所にわざと雨の日に行くのは愛情の押し売りで，有明の月がかかっているときに妻問う方が風情あるとする（小学館新版『枕草子』274 段）。

「月は有明の，東の山ぎはにほそくて出づるほど，いとあはれなり」と絶賛する（同 235 段），清少納言の美意識からすればそうであろう。

こうして夕暮と暁の二つの時間帯は，俊成，定家，家隆の時代に，日本の月影さす美しい風土風情に妻問婚の風習の「待ち心」の心情有情が諧和して

独特の情趣をたたえた美的な幽玄の時間帯になったのである。妻問婚の風習抜きでこの二つの時間帯の美的昇華を考えることはできない。

妻問婚風習は鎌倉初期で終焉しているので，定家と並ぶ家隆（1158–1237）の詠歌，

いまはただ待たじと思ふよひ〳〵のふくるもつらき鐘のをとかな

（「家隆卿百番自歌合」132　岩波新版『中世和歌集』鎌倉篇）

は，「頼めつつ来ぬ夜あまたになりぬれば待たじと思ふぞ待つにまされる」（拾遺 恋三 848　柿本人麿）の本歌取りで，いわば妻問婚の残響である。

鎌倉末期から南北朝にかけての歌人，兼好，二条良基，頓阿，慶運らには，ほととぎすを待つ詠歌はあれ，「待つ恋」の詠歌はほとんどない。あっても懐古的か本歌取りの詠歌で実状のそれでない。

ここを兼好法師の王朝妻問婚の懐古趣味をとどめる言葉で締めくくろう。

「梅の花かうばしき夜の朧月にただずみ，御垣が原の露分け出でん有明の空も，わが身さまに偲ばるべくもなからん人は，ただ色好まざらんにはしかじ。」（小学館新版『徒然草』240 段）いわんとするところは，朧月夜の夕暮に恋人の訪れを待ち，有明の月がかかる頃に朝露に濡れて別れる風情をわが身のこととして偲べない人は，色恋などする資格はない，と。

（つづく）